

牛島春子『祝といふ男』の基礎的考察 ——転載の経過から主人公造型論に及ぶ——

崔 佳 琪

Abstract

Of many Manchurian literary works left to this day, Ushijima Haruko's *A Man Named Shuku* has often been discussed, and the text has been reprinted and introduced as a famous literary work written by a Japanese author. A comparison of seven reprints of the publication to the present, reveals some modifications in the paragraphs and contexts. No articles have been written so far as to what extent each modification was made and what kind of modifications were made. Therefore, the present article will reevaluate the character of Shuku after making these modifications clear.

キーワード：転載、分段構成、検閲、宣傳的、官僚的

はじめに

牛島春子（一九一三～二〇〇二）の短編小説『祝といふ男』（転

載の場合、『祝という男』と表示されたものもあるが、本稿では初出に拠ることとする）は、一九四〇年九月二十七日から十月八日にかけて、「満洲新聞」に、十回連載された作品である。主人公祝しゅく廉天れんてんは満洲国の或る縣長辦公處の通訳であり、強い個性の持ち主である。満系にも日系にも嫌がられているのは、この主人公の人物像のもっとも印象的なところで、作者は、「満洲国」時代における個性の強い人物を通して、その時代の民族の不調和を鮮やかに描いたといわれている。

この作品に関する先行研究を見渡すと、主人公に対する検討が、しかも民族問題からの言及がほとんどである¹⁾。それらは「祝は日本の侵略戦争の犠牲者だ」と結論づける方向の論である。しかし、祝の人物像はこの角度だけからでは、十分に把握できないと私は思う。また、この作品は「満洲」という枠組みだけからではなく、評価できるのではないだろうか。

私は『祝といふ男』を文学として評価するために、研究史を整理したのち、テキストそのものを冷静に見直すことから始めた。その結果、この作品が注目され、何度も転載されながら、微妙な（しかし見過ごすことのできない）改変の手が加わっていることに気づいた。そして、このテキスト改変は主人公・祝の人物像にも関わることに思いついている。

本稿では『祝といふ男』の初出及び転載のテキストを比較検討した結果を報告し、これらの検討から考えられる問題のいくつかを紹介し、考察を加えたい。これによって、この作品における祝

の人物像を改めて評価したい。
考察の第一歩として、私はテキストにもどって読み直すことから始める。

一、初出及び各転載を見直す

この作品は、発表以来現在に至るまで、私の調べる限り少なくとも七回転載されている。初出も含めて作品の発表雑誌及び収録選集類は左記の通りである。

- ① 初出…「満洲新聞」（一九四〇年九月二十七日〜十月八日）
○年十二月
- ② 山田清三郎編『日満露在満作家短編選集』、春陽堂書店、一九四〇年十二月
- ③ 「文藝春秋」一九四一年三月号
- ④ 川端康成他編『日本小説代表作全集・昭和十六年前半期』第七卷、小山書店、一九四一年十二月
- ⑤ 橋川文三他編『昭和戦争文学全集』第一巻「戦火満洲に挙がる」、集英社、一九六四年十一月
- ⑥ 黒川創編『（外地）の日本語文学選』第二巻「満州・内蒙古／樺太」、新宿書房、一九九六年二月
- ⑦ 川村湊監修『牛島春子作品集』「日本植民地文学精選集」「満洲編」七、ゆまに書房、二〇〇一年九月（但し、『祝といふ男』は①の影印版である）
- ⑧ 川村湊監修『日満露在満作家短編選集』、「日本植民地文学精選

集」「満洲編」九、ゆまに書房、二〇〇一年九月（但し、これは②の選集一冊の影印版）

転載は、戦中三回、戦後四回である。龐大な満洲文学作品の中にあつて、『祝といふ男』がいかに重視されてきたのか、これらの転載から窺うことができるだろう²⁾。

ところで、この七回の転載の実質をもう一度並べ直すと、

- ① 初出。——影印⑦
- ② 転載第一回。——影印⑧
- ③ 転載第二回。
- ④ 転載第三回。
- ⑤ 戦後転載第一回。
- ⑥ 戦後転載第二回。

となる。そして、これらを比較してみると、影印は言わずもがな、各転載も初出の形がそのまま転載されてきたかのように見えるが、実はいくつか改変されていたことが分かった。まず、初出が十回連載十段落であつたのを、転載ではいくつか組み合わせ変えて段落を再構成するものがある。また、本文の字句の変化もある。これらの変化は、牛島の代表作というのみならず、満洲文学の代表作とも見なされるこの作品にとつて、見逃すことができないと私には考えられる。なお、段落とテキスト改変に関して、これまでに全く注意されたことはなかったと思う。

段落改編とテキスト改変は、誰が行つたのだろうか。一般的には作者・牛島の手になるものと想定されるのだが、作者の付記の

類もなく、後年の牛島のこの作品に対する回想にも、そのことに関する証言がない。そのため、⑥までの転載について、牛島本人が点検し改訂したかどうか、今のところはつきりしていない。なお、牛島は二〇〇二年に亡くなっているので、⑥までの転載における改変は、本人が関与した可能性もあつたはずである。しかし、一方で、改変は選集の編者が行つた可能性も考えられる。この点に関して、明確な結論を導くことはできないが、いずれにしても、この作品が、どのように読まれてきたか、どのように読まれることを想定されてきたのか、ということを知る重要な手がかりになると私は考えている。まずはその実態を報告することから始める。

二、作品の分段構成について

作品は次々と転載されたが、作品の分段構成は、それぞれの転載によって、初出と異なる場合がある。そのため、作品内容を検討する前に各転載の段落構成は、どの程度、どのような違いがあるのか、まず触れておきたい。

1 新聞連載の形

先述のように、作品の初出は新聞の連載十回である。本稿は前掲⑦の新聞初出影印版によつた。この連載は(1)〜(10)と番号が付されている。作品はその後影印版を除けば五回転載された。各転載を確認した結果、前掲②と③は新聞連載時の形を踏襲して、十の

部分に分けられている。本文そのものはごく一部分の改変を除いて、初出の本文が踏襲されている。本文改変箇所については、節を改めて検討する。まず、この形で作品の分段構成を考える。

作品内容から言えば、連載十回は、物語の内容に応じた分段ではない。一回ごとに内容が必ずしも一区切りではない。例えば、第四回の最後は「副縣長殿、こりやあの訴へた奴の方が怪しいですな」と祝の言葉で終るのだが、第五回の最初は『うん、さうかな』真吉は素直にうなづいた』とあつて、第四回から第五回へは、祝と真吉の会話が續いているのである。このような分段は新聞連載の各回の割当て字数などの理由があつたからこうなつているのか、或いは物語的に読者の関心を次回の掲載につなぐためにそうしたのであろう。

また、連載四回目をみると、ほぼ半分ぐらいのところに、「※※」で一行分を取つている。ほかの回にはこのような表示はない。これによつて、この四回目の途中で、全体を大きく二つの部分に分けていくことが分かる。

初出の新聞連載十回の分段構成をみて気づく特徴は以上の二点である。ここで十回構成に基づき、『祝といふ男』の内容を把握しておくことにする。

2 『祝といふ男』の内容把握

「※ ※ ※」に注目して、作品を前半と後半の二部分に分け

られると見るならば、前半（三回十四回目前半）は祝に対する初印象の描写が中心である。これらを整理してみる。

a 祝の外貌の描写

〈1〉刃物の陰しさを思はせる瘦せた肩をそびやかして署内を
あるきまはる

〈2〉際立つて身のこなしの敏捷な日本語の達者

〈3〉肉のそげた蒼白な顔

b 祝に対する評判

〈1〉非常に悪質な満系通譯

〈2〉非常に評判の悪い男だ。

〈3〉あいつが一番威張つてる。

c 祝に関する疑惑

元の上司吉村への餞別金にかかわる事件で、吉村は免職になり、祝は始末書で済んだ。世論は祝が餞別金を着服したと騒いだが、祝はそれを否定する。

d 現在の境遇

真吉は赴任に際して、祝に関する悪い評判を聞いたが、「自分の目でじかに見極めぬことには、下手な判断はくたせぬ」と思い、しばらくくくびにせず、祝を使ってみることにする。などが表現されている。

後半（四回目の後半と後の六回）は、祝の仕事上の出来事を描写する部分である。

① 徐という男は張という男が自分の実兄を殺害したという

訴状を真吉のところに出してきたが、祝は以前の経験を生かして徐が誣告したと解明し、事件を素早く解決する。

② 警察官の乱行事件について、祝は全力を尽くして真吉に協力し、深夜でも調査のために出かけた。その結果、確実に証拠を押さえた真吉は八人の警察官を処罰することができた。

③ 真吉の県で募兵の下検査を行う際、祝は厳正に公平に行い、村民からの信頼を得た。

④ 軍馬購買の時、祝は村民と軍の間に立って、双方とも満足するような価格を設定し、購買は大成功に終わった。

⑤ 真吉は着任して満一年、転任することになった。祝は真吉と二人だけの時一度弱弱しい姿を見せたが、仕事に戻ると、再び元の冷やかな表情に変わった。別れの時、祝の冷たい化石のような顔は恐ろしかった。

このように、主人公祝に対する評判の変化について、作者は作品の構成の面において二つに大きく分割し描いたと読み取ることができる。以上、初出の構成について、内容との関連でまとめてみた。

3 段落構成の変化

次に、④⑤⑥の転載を見よう。これらは十回分のいくつかわからないで、それぞれの形にしている。そこで、作品初出及び転載における構成と分割に関して、図示してみる。

図を見ながら、④⑤⑥の作品分段の設定について、考察したい。概観的に言うと、この三つの転載は三者三様の分段方法である。④と⑤は八段だが、段落数が同じにもかかわらず、分け方が異なっている。⑥は六段である。これは最も新しく九十年代の転載であり、分段の方法もかなり変化したと言えるだろう。④⑤⑥は初

| | | 後半 | | | | | 前半 | | | | 転載歴番号 | |
|-------|---|------|-----|-----|-----|-----|----------|-----|-----|----------|-------|---|
| 戦中の転載 | ① | (10) | (9) | (8) | (7) | (6) | (5) | (4) | (3) | (2) | (1) | ① |
| | ② | (10) | (9) | (8) | (7) | (6) | (5) | (4) | (3) | (2) | (1) | ② |
| | ③ | (10) | (9) | (8) | (7) | (6) | (5) | (4) | (3) | (2) | (1) | ③ |
| 戦後の転載 | ④ | (8) | (7) | (6) | (5) | (4) | (3) | (2) | (1) | (3) 戻りあり | | ④ |
| | ⑤ | (8) | (7) | (6) | (5) | (4) | (3) | (2) | (1) | | | ⑤ |
| | ⑥ | (6) | (5) | (4) | (3) | (2) | (1) 戻りなし | | | | ⑥ | |

図 1. 『祝といふ男』各転載による段落配分図

- (5)

冒頭文…「うん、さうかな」真吉は素直にうなづいた。

○ 訴訟事件は公正な判決が出た。

○ 真吉の心理描写（祝の必要性について）

○ 役所人（警務科を始め）の賭博問題に関する真吉の対策

終結文…この訓示のみそであった。

(4)

冒頭文…祝廉天が歸つたあと……

○ 真吉の心理描写（毒にも薬にもなる果物の誘惑）

※ ※ ※

○ 真吉は祝をくびにしないで使ってみることにする。

○ ある訴訟状に対し、祝の積極的協力のため、真吉の聞き取り調査はうまく進んだ。

終結文…「副縣長殿、こりやあの訴へた奴の方があやしいですな。」

(3)

○ 祝と真吉の談話（吉村事件について）

○ 妻みちの初登場

○ 祝の退去

終結文………と二、三度たてつづけに頭をさげて又庭づたひに歸つて行った。

出と異なる分段方法のため、作品に違う風格をもたらしたと私は考える。

次にこれらの転載における作品の分段方法を分析・整理した上で、それぞれのような特徴があつて、分段によってどんな異なる効果があるのかを検討したい。

まず、それぞれの分段の特徴をみるために、変化が集中している部分（初出で言えば(3)〜(7)について、それぞれ主な内容、冒頭文と終結文をあげる。

冒頭文…年があけ休みも終わって……

○ 祝が自分の賭博行為を認めた。

○ 祝は真吉を案内して警察官の不正行為を調査する。

(6) 終結文…「真吉は家に入り、妻が着せかけて呉れる丹前に手を通しながらやれやれと煙草に火を点けた。」

冒頭文…「凡そ二週間ばかり前、……」

(7) ○ 警察官の不正行為問題の解決経緯と処罰方法

次は④⑤⑥の段落構成を確認しながら、それぞれの特徴を検討したい。

A. ④の『日本小説代表作全集・昭和十六年前半期』

この転載は、作品発表後一年余りを経た一九四一年十二月である。作品が話題になっていた時期であろう。分割は大部分となっている³。初出の(3)(4)(5)段をひとまとまりにして、大きな第三段としている。

表示したように、元の(3)の終わりは「……と二、三度たてつづけに頭をさげて又庭づたひに歸つて行つた。」と書いて、一行あけて(4)の始めは「祝廉天が歸つたあとと真吉は未だ祝と向きあつた姿勢で黙つて考へてゐた。」であつたが、④では二つの文は一行あけではなく、連続して進んでいる。

(3)と(4)の内容は祝と真吉との初めての談話の場面であり、真吉の妻のみちが初登場の場面でもある。(3)と(4)を連続させたのは内容の連続性を重視しての処理であろう。要するに「歸つて行つた」と「祝廉天が歸つたあと」という強いつながりがある場面では、

連載の時、読者は歸つたあととはどうなったのかという期待を持つ。しかし、続きは次回の掲載を待たなければなるまい。連載終了後に、全体をひとまとまりの作品として収録する時に、物語の緊密性を考慮して、つないだのであろう。

ところで、(3)と(4)では、場面の主体的人物が異なっている。(3)の最後「歸つた」人は「祝」であるが、(4)の冒頭では、「祝」が歸つた後の真吉の心理描写から始まる。主体的人物は「祝」から「真吉」に変わった。このように読めば(3)と(4)はそもそも異なる「塊」と考えられる。そうすると、④では物語の主体的人物の変化を重視して区切りを考えると、④では物語の主体的人物の変化を重視して区切りを考えると、④では区切ることなく、区切りを設けなかったと考えられる。

次に(4)と(5)を続けていることについては、(4)の終わりは「副縣長殿、こりやあの訴へた奴の方が怪しいですな」と(5)の始めは『うん、さうかな』真吉は素直にうなづいた」というように、初出は会話の途中で区切っているが、④では区切ることなく、会話をそのまま続けているのである。

初出は新聞連載であつたためにほぼ均等量の十回分であつたが、転載に際して、時間の同一性と事情の連続性を勘案しながら分割法を変えたのであろう。すでに述べたように、④の前の転載はすべて初出を踏襲する形だが、④からは本格的に作品をまとまった形にするように再編成して登場させたのだといえよう。

B. ⑤『昭和戦争文学全集』

この全集は戦後発行のものである。初出と比べると、仮名遣いや表記（旧字体→新字体）がすべて現代日本語の表記に準じて変えられていることが分かる。作品のタイトルも「祝といふ男」から「祝という男」に変化している。これらの変化により、戦中の四十年代の雰囲気は薄れることになったといつてよい。ここでいくつかの例を挙げる。

I. 仮名遣い

例、「かういふ機会」——「こういう機会」

「署内を歩きまはる彼は」——「署内を歩きまわる彼は」

「真吉は笑ひ出した。」——「真吉は笑い出した。」

II. 漢字表記

例、「縣長辨公處」——「県長辦公處」

「確證」——「確証」

「檢察廳」——「検察庁」

その上、分段構成の面においても、④とは異なる形で、再編成を行っている。その特徴は二点である。

1. (3)の全部と(4)の「※」の前の部分を一まとまりにし、(4)の「※」の後と(5)を一まとまりにする。さらに「※」は削除し二つの部分を一行あけとしてしていること。

2. (6)と(7)を一まとまりにしていること。

1 について——初出は「※」によって場面転換を表していたが、⑤では「※」を削除し、一行あけることによって、前と後の関係を更に明らかな区別をつけた。

2 について——(6)の終りは「真吉は家に入り、妻が着せかけて呉れる丹前に手を通しながらやれやれと煙草に火を点けた。」とあって、帰宅して真吉が寛ぐ場面で終わる。(7)の冒頭は「凡そ二週間ばかり前、縣城で只一つの大きな風呂屋「金華池」では次のやうなことが行はれてゐた。」と始まるから、物語のシーンが転換したやうであるが、作品全体の中で(6)を見ると、警察官の乱行問題を取り上げ始めていて、この事件が一段落して真吉は帰宅。(7)は真吉がこの問題について、この二週間祝と一緒にどのように対応したのかということをお想している。この分け方は(6)と(7)を一つの事件（警察官乱行問題）として扱おうとする、妥当な組み合わせといえるだろう。

C. ⑥『外地』の日本語文学選』

これは九十年代の出版物である。仮名と漢字の表記は⑤と同様である。さらに、読解の助けとして、いろいろ注も付されている。この転載は解題によれば『昭和戦争文学全集』を底本としたとあるが、実は構成については⑤よりさらに変化させているのである。

具体的に言う、(1)(2)(3)と(4)の前半（「※」の前）を連続させて、大きな一部分としてしている。前述したように、作品の前半は主人公祝の登場にとつて、最も重要な部分である。彼の評判からはじめ、外貌、性格などそれぞれ違う角度から主人公の特質を表現している。そして、祝と真吉の初めての談話からは、言葉遣いを通して、祝の強烈な人間像を読者に印象づけるのである。その意味では、

この人物に関する基本情報を分段させず、一まとまりとするのは、妥当な方法といってもよからう。

また、この大きな一段落における祝の人物像は次の順序で描かれている。

評判↓外貌↓評判↓外貌（動作も含む）↓外貌（細かい）↓評判↓外貌（細かい）↓言葉づかい

この順序からわかるのは、対象とする人物そのものの姿を写実的に描写することから始めるのではなく、人々の評判（噂）から始めているのである。つまりこの人物に関する描写は最初から確実な形を示すのではなく、ある程度不確かな情報を読者に提供することによって関心を持たせようとしている。何度か「評判」と「外貌」を繰り返した後、真吉との会話の場面で祝は物語中によりやく登場するのである。ここまでは祝の人物像にとって導入的段階と言える。

祝と直接会った後でも、真吉にとって祝は、やはり明らかかな全体像をつかみきれない「毒にも薬にもなる、果物の誘惑」という印象であった。こうして、真吉の祝に対する認識の初期段階が終わる。それで、これらを一部分にまとめることによって、小説の導入部における祝の人物像の分散的な情報を統合することになった。祝は身近なものに探求心をおこさせるような独特な個性の持ち主だと描かれているのである。

小括

段落構成に変化の認められる三つの転載を改めて見直してみる。初出の十段落のいくつかを繋ぎ直すことによって、もともとは形式的な段落であったものが物語の内容との関係で有機的に（物語の連続性、時間的進行性、祝の人物像の鮮明さなど）構成し直されていることが分かる。

分段方法はそれぞれ年代や編者の個人的好みなどによって異なっているが、作品に対して、この多様な分段により、作品を時間的、空間的などの異なる視角から読むことができるだろう。どの転載が最も作品に合うのかについて、安易に判断することができない。各方法はそれぞれ特徴がある。私見としては、⑥の分段方法は転載の中で比較的分かりやすく、初出を合理的に分け直したと感している。統合性の面においても物語の連続的進行の面においても、前の二回より進んでいると思う。

三、作品中の字句表現の改変

ここまで、『祝といふ男』の各転載の分段について、検討してみた。

ところで、私は各転載のテキストを確認する際、分段構成だけではなく、表現上にも初出と異なるところがあることに気付いた。一見すると、各転載のテキストは初出を尊重し、踏襲しているか

のように思われるのだが、詳細にテキストを確認すると、違う言葉遣いになっている箇所のあることが分かったのである。この変化はどの程度のもので、どのような意味があるのか、検討しなければなるまい。対校の結果、初出、②、③の間で重要な問題がある。②と③は初出と同時代に出た転載であるため、後の転載に影響を与えたことが推測される。次はこの間の異同について検討することにして、戦後の転載については、機会を改めることにする。まず初出と②、初出と③の対校結果を示すことから始める。

三―(1) 初出と②

初出と②の比較結果を対照して示す。

| | | | |
|-----|--|---|---------------------------------------|
| (1) | 醜草(七八頁) 他の課(七九頁) これはもうまるで(七九頁) | ② | 醜聞(二一八頁) 他の譯(二二〇頁) これはまるで(二二〇頁) |
| (2) | 印象をあたへるのに適應しい。(八〇頁) | | 印象をあたへるに相應しい。(二二二頁) |
| (3) | 相當値が出て(八二頁) | | 相當値が出し(二二五頁) |
| (4) | 因襲(八四頁) | | 因襲(二二七頁) |
| (5) | 相手の弱點(八六頁) 怠惰怯懦(八六頁) 行くところが(八六頁) | | 弱點(二二二頁) 怠惰(二二三頁) 行くところが(二二三頁) |
| (6) | 確證を握るとが(八八頁) みちががとみると(八八頁) | | 確證を握るとが(二三三頁) みちが出てみると(二三三頁) |
| (7) | 「その娘・・・自由にしてしまつた」 時々つまつては(九〇頁) 看手(九一頁) | | 一文カント 時々つまつては(二三七頁) 看守(二三九頁) |
| (9) | 兵児帯(へこおび)(九四頁) なし | | 兵古帯(二四三頁) その折衝のため真吉は三度ほど(格) |

転載②は全部で十六箇所の改変がある。言葉(漢字)の違いは

八箇所、漢字や仮名の増減は八箇所がある。これらの改変を点検してみると、(7)の中で文を一つカットしたのを除いて、他はほとんど小さな誤植的なものの修正など、微細な改変であることが分かった。しかし、初出の誤植を修正したと同時に、新しい誤植も出ている。たとえば、

- (1) では「醜草」↓「醜聞」、「他の課」↓「他の譯」
- (2) では「あたへるのに」↓「あたへるに」
- (3) では「出て」↓「出し」
- (5) では「兵児帯」↓「兵古帯」

以上は②で新たに出てきた誤植とみなすことができる。

一番大きな改変は、(7)の中の一文のカットである。これについては、節を改めて取り上げる。

三―(2)、初出と③

次に、③との対校結果を示す。

| | | | |
|-----|--|----|---|
| (1) | 鋭さにあつた(七八頁) 真吉は(七八頁) 成程成程と聞いて(七八頁) それよりもすこし浮づつた(七八頁) 宣傳的(七八頁) 他の課の職員達(七九頁) これはまるで(七九頁) | 初出 | 鋭さにあつた(三八四頁) 真吉も(二二〇頁) 成程成程と聞いて(三八五頁) それよりもすこし浮づつた(三八五頁) 官僚的(三八五頁) 他の職員達(三八五頁) これはまるで(三八五頁) |
| (2) | 各村から集めてまはつた(八〇頁) 印象をあたへるに適應しい(八〇頁) | | 各村から集めてまはつた(三八六頁) 印象をあたへるに相應しい(三八六頁) |
| (3) | 南海あたり(八二頁) | | 南満あたり(三八七頁) |
| (4) | 因襲を根深にして(八四頁) 何かしら不安な(八四頁) | | 因襲を根じらして(三八八頁) 何か不安な(三八八頁) |

| | | | | | |
|---|----------------------|---------------------------|--------------|--|--|
| (10) | (9) | (8) | (7) | (6) | (5) |
| 見せたいこと 真吉達ののつたトラック 真吉の毒だつたと思ひます (九六頁) (九七頁) | 家事に 兵児帯 (九四頁) | さういふ事 非情な冷酷さ (九三頁) | 看手 (九一頁) | 確證を握るとが みちががてみると、 頼の帽子を被つて (八八頁) | 社会の 相手の弱點 怠惰怯懦 行くことが 日本での罪悪感 (八六頁) (八七頁) |
| 見せたこと 真吉ののつたトラック 真吉の毒だつたと思ひます (三九六頁) (三九七頁) | 家事に 兵古帯 (三九五頁) | さういふ事 非情な冷酷さ (三九五頁) | 看手 (三九三頁) | 確證を握るとが みちが出てみると、 頼の帽子をふつて (三九二頁) | 社会の 弱點 怠惰 行くことが 日本の罪悪感 (三九〇頁) (三九〇頁) |

表で明らかのように、③は②に比べて、改変箇所は倍に増えている。全部で三十三箇所がある。②と同じ所は十二箇所があるほか、初出と意味が異なる言葉の改変もある。これらは誤植かどうか容易に判断できない。芥川賞の選評によれば、小島政二郎と瀧井孝作は『祝といふ男』を『在満作家短編集』で読んだことを明記している。しかし、③は②をそのまま踏襲して、転載したものではないと考えられる。次は③に新たに出てきた改変をいくつか挙げる。

(1)では「宣傳的」↓「官僚的」

(3)では「南海あたり」↓「南満あたり」
(7)では「顔色も動かさない」↓「顔色も動かない」
などがある。

ところで、③の改変では、(1)の「宣傳」から「官僚」への変化及び②同様に(7)の一文カットが最も目立つと思う。この問題については次の節で改めて検討する。

以上、初出と②と③それぞれとの対校結果について、少なくとも以下の二点にまとめることができる。

1. 前述した②で新たに出た誤植は「醜草」を除いて、②と同様に修正しないままだった。③では②の中の改変の大部分を継承しているが、初出とまったく異なる改変もあるため、②よりも初出版から離れることになった。
2. 初出にせよ、転載にせよ、誤植が少ないとは言えない。しかし、作品の本意に関わるのではないかと考えられる改変もある。

ところで、簡単に見過ごすことができないような改変箇所がこの②と③では二箇所ある。次はこの二つの大きな改変箇所について、具体的に検討したい。

三―(3)、改変二箇所に関する検討

へその一(7)における一文のカット

初出の(7)に、警察の乱行事件を描くシーンでは、ある若い警長が隣の芝居小屋から俳優をしている娘を連れ出して、上司と見ら

れる警尉にひき合わせる場面がある。初出のテキストに次の場面がある。

……隣りの芝居小屋の俳優をしてゐる養子娘を連れて来た。

一同を一足先に歸へしたあと、先ほどから連中の音頭取りらしく見えた警尉が一人残つてゐたが、その娘が来ると風呂の中に
つれ込み、拳銃をつきつけて無理やり自由にしてしまった。

かういふ厭な事でも、相手が警察官ならば――

右記の網掛けの一文はカットされた。②以降のすべての転載（もちろん初出の影印⑦は除く）は、これを踏襲している。このような一文カットの改変は作品全体ではこの一箇所しかない。この変化箇所は作品全体を把握するのに、重要視しなければならないと私は考える。

この改変は作者の手によるものかどうかについて、今のところ確認できないため、当時の出版状況を考慮して、自分の意見を述べたい。

この文は警察の乱行事件の中心におかれる警尉の強姦の描写である。推測としては、当時の出版検閲などの関係で、カットさせられたか自制したのではないだろうか。この推測については、②と③転載時の選評などを確認して、この改変にかかわる背景を推測したい。

まず、『日満露在満作家短篇選集』の山田清三郎の書いた編者序

では、作品について「ここに輯めた各小説は、何れも、最近満洲新聞の夕刊一面に順次連載して、それぞれ好評を博したものである。」とある。転載にともなつてテキストを改変したかどうかの言及はない。

ところで、③の「文藝春秋」の芥川賞選評はどうだろうか。こちらにも、『祝といふ男』そのものの改変についての言及はない。しかし、ほかの作品についての選評の中に、少し手掛かりらしいものがある。

この時、同じく候補作であつた『崖』について、小島政二郎は次のように述べている。

……殊に母と云ひ兄嫁と云ひ、就中兄嫁の描寫などは、そこに肉體を感ずる位ヴィヴィットに描かれてゐる。（中略）
私はこの作に一番點を入れた。しかし、この作は不幸にして本誌上に再録出来ない性質を持つてゐると注意されて斷念した。（傍線筆者、以下同）

この選評から、当時の作品発表の制限を感じることができる。要するに時局によつて、ある題材の作品は優れていても発表できないことがあつたのである。作品『崖』については、瀧井孝作もこの作品の特殊性について言及している。

……作品の主題は、戦死者の未亡人の再婚問題が扱はれて

みて、現在の當局の忌避に觸れる點もあるやうで、一般には發表できない作品と思はれた。一般の人に一讀をすすめられないのは惜しいと思つた。

作品の主題は当時「忌避」すべき題材であつたため、制限された。私は『崖』という作品は未見だが、「戦死」に関わることであり、未亡人の「肉體」にも関わることだとすれば、国家的な見地、そして国民道徳的な見地から公表をはばかるべきとの「文藝春秋」内部の自己規制があつたのであろう。ここから見れば、当時の作品検閲が非常に厳しいようであり、作品を自由な表現で発表するのは困難な時代であつた。これらを背景として考えるなら、『祝といふ男』のカットされた一文は、国民の守りとして、模範を示すべき警察官の卑劣な行為である。検閲との関係が十分に想定される。

またカット後の本文の前後の連結関係を見直してみると、ここは無理にカットされ、その前後の修正を行っていないことは明らかである。

先ほどから連中の音頭取りらしく見えた警尉が一人残つていた。

カットされた文

かういふ厭な事でも……

とあるから、「かういふ厭な事」が何をさすのか分からなくなっているのである。

戦時中の検閲問題について、数多くの先行研究があげられる⁴⁾。この時代の体制と言論活動・文学活動の關係の知見を広げた上でとらえ直す必要があるが、今後の課題としたい。

〈その二〉「宣傳的」と「官僚的」

初出の(1)に、真吉と協和会事務長・河上との会話の場面がある。ここで、河上は祝という通訳の印象に関して、「第一非常に宣傳的だよ、(傍点筆者、以下同)」と発言する。ところが、各転載を確認したところ、このセリフには変化があることが分かつた。

まず、②は、初出と同様に、「第一非常に宣傳的だよ。」と書いている。しかし、③は「第一非常に官僚的だよ。」に変化している⁵⁾。これは重要な改変箇所だと私は考える。なぜならば、「宣傳的」と「官僚的」とでは、それぞれの意味が違うのは言うまでもないことである。実は最初、この改変箇所は誤植ではないかとも思った。なぜならば、「宣傳」と「官僚」はウ冠の字と人篇の字の熟語であるから、植字工が見間違えたのではないかと考えた。しかし、そういう可能性は少ないと私は推測している。「宣傳的」は物事を大げさに言う傾向・性質を意味するのであり、「官僚的」ならば公務員で融通がきかなく、形式主義的に物事を判断し処理する傾向という意味になるだろう⁶⁾。作品にもどつて言うならば、前者は祝の話し方の個性を客観的にいう言葉だとすれば、後者は祝の役所における身分に注目しながら、彼の性格を主観的に評価する言葉といえよう。

この字句は作品において初めて発せられる。祝に対する確実な評価の言葉である。真吉は河上との話の前に、いろいろな噂話では「悪質」だとか「評判の悪い」だとかの言葉を聞いたが、それらはただ噂話の次元に止まっていた。ここは作品として直接真吉に祝の評価を伝える最初の場面だったのである。更に、この「宣傳的」(或いは「官僚的」)の前に「第一非常に」という程度を表す副詞を加えてまでもいる。まさに祝の性格の、しかもあまりいい意味ではない、最も目立つ特徴を表現していると言えるだろう。したがって、このような効果をもつ字句の変化は、注目しなければなるまい。

作品全体を読み直すと、この箇所以外には、「宣傳的」或いは「官僚的」という用語は出てこない。ただ一ヶ所の批評の表現であるが、全体を覆うような効果をもっているだろう。改変には意図があったと考えたい。

祝の人物像を「官僚」という言葉で捉えているのは、川村湊の批評がある。

i. (前略) 日本人よりも日本人化した満州人。下層官僚として、融通の効かないその性格は、まさに「植民地人」の一つの典型というべきものである。

ii. それは満州国が近代国家として発展するならば、官僚として必要とされるタイプの人間ということになるだろう。彼は副県長の真吉の有能部下として活躍する。しかし、彼はその

満州国の地方の官僚としての有能さのために、自らの「民族」「民族性」を、植民者、侵略者の側に売り渡さなければならなかったのである。(7)。

祝の人物像を分析するこの部分で、川村は「官僚として」を三回も使っている。氏はここで祝の「官僚」性質を強く見ているように見える。このことを踏まえながら、祝はいったい「宣傳的」と描かれているのか、それとも「官僚的」と描かれているのか、改めて作品内容に基づいて、検討したい。

〈その三〉「宣傳的」と本文

改変前の「宣傳的」と改変後の「官僚的」が、本文中の祝の描かれ方に対し、当てはまるかどうかについて、それぞれ確認しなければなるまい。ここではまず、「宣傳的」について検討し、「官僚的」については、次の節で述べたい。

前述のように、「物事を大げさに言う」のが、「宣傳的」であるから、主に「話す」動作がどのように表現されているのかを検討する必要がある。私は祝の「話す」場面の描写を抜き出し、それに基づいて考察を進めたい。

- (1) 誰彼の區別なく、遠慮に相手を見据えて、つけつけと物を云ふ。……A
- (2) 祝が吉村との関係をべらべらと問はれるままに喋つてしまつ

この三つの特徴から祝の「宣傳的」さが見えるかどうかを改めて検討する必要がある。さきに述べたように、**A**の強い勢いはほとんど作品全体を貫いている。抜き出した文では半分以上**A**で示されている。このほか、**C**からも強い勢いがあるといえる。一般的に「おおげさ」に話す時、「早口」なのは理解できる。この二点から見れば、祝は確かに「宣傳的」な特徴とあてはまっている。河上が言う「宣傳的」な人間だというのは小説全体の祝の描かれ方とつながっている。

ところで、**B**の「冷酷」は、直接に「おおげさ」とかわりがないが、掘り下げて見れば、これは祝の人物像を捉える大きな基盤的なものではないかと考えられる。つまり、祝の「宣傳的」は彼の外貌の「冷酷」さから見えなかもしれないが、実はこの「冷酷」の裏には、外部世界に対する強い勢いが潜んでいる。これは逆の形で、彼の「宣傳的」を強調したのではなからうか。まとめていうと、**B**は**A**と**C**の特徴を補充する役割を果たしているといえよう。

そのほか、祝に対する直接的な描写ではないが、(5)での真吉の満人に対する感想の中に、祝が「宣傳的」と見られる理由を窺い知ることができる。

満系達は日本人のやうに弱點を發きあつて満人の前でおおびらに喧嘩をやるやうなことはほとんどない。彼等は日本人の前に出ると、一樣にお互いのことについて口をつぐんだ表

情になつてしまふ。

ほかの満人はそろって、日本人の前では、「口をつぐんだ」とある。そのような満人の中にあつて、ただ一人・祝は「無遠慮」な独特な性格を持ち行動している。まわりから特に日本人からは「宣傳的」に見えるのは、当然といつてもよさそうである。まとめて言えば、祝の「傲慢さ」と「無遠慮さ」はほかの満人より「宣傳的」に見られる要因だといえるだろう。

〈その四〉「官僚的」と本文

次に、「官僚的」と改変されたことと、作品中の祝の仕事ぶり描写とが、どのようにに対応するのか検討する必要がある。

この作品の祝は官僚として、「融通の効かない」、「有能さ」をもつ人物として描かれているのかどうか、改めて作品中の四つの仕事の場面を通して検討してみる。

② 訴訟事件

この事件は最初の事件だが、それほど詳しく書かれていない。分量はこの四つの場面の中で一番少ない。この事件における祝の人物関係の描写はほぼ次の訊問の部分に集約される。

成程祝のやり方は唯の通譯とはちがつていた。彼は相手がすこしあいまいな物腰になると急に目を光らし眞吉の質問を

ひつたくるやうにして通譯したが、體をのり出し威嚇するやうな激しい勢ひだった。

この部分の描写では、祝の動作の速さと敏捷さが十分に現れている。これはちょうど真吉の祝への初印象「身のこなしの敏捷な、日本語の達者」と合っている。祝は少しでも曖昧なものを許さない、いわば率直な性格といえる。このような性格であるからこそ、赴任したばかりで満人社会の実状をよく知らない真吉にとつて、祝の協力は欠かせない存在であった。しかも、赴任直後初めての訴訟事件に対して、事情の分析、関係調査などの面で、祝は大いに通訳の枠を超えていた。ここから見れば、確かに祝に「有能さ」があるのは間違いない。しかし、「官僚として融通の効かない性格」はここでは現われていないと考えられる。彼は訊問を通して、訴えた方の徐を疑った。その結果、確かに徐の誣告であった。この点について、少なくとも彼はこの事件の処理において、「臨機応変」の能力が強かった。これは「融通の効かない」というよりむしろ正反対で、「融通の効く」性格と言うべきではないだろうか。

⑥ 警察乱行事件

この事件を通して、真吉は祝の存在の重要性をさらに確かに感じるようになった。

④の訴訟事件と違って、この乱行事件では祝が現地調査から始まって判決にいたるまで、始終真吉のそばにいて実質的に動かそ

うとする位置にあった。

訊問が始まると祝はびつたりと真吉の傍にいて、真吉の鋭い訊問を注意深く、正確に通譯して行つた。興奮もしていず、顔色も動かない。その機械のやうな非情さは不氣味にすら見えた。かういふ時、祝の持つあの鋭利な刃物にひやりと觸れる氣がする。

この乱行事件を扱うところでは、祝の表情の描写が多い。例えば、「機械のやうな非情さ」などから、祝の厳正な性格が窺える。つまり、捜査対象・訊問の相手は自分と同じ「満系」の、しかも警察官であるにもかかわらず、そのことを意に介することなく、不正な行為には、必ず厳重に対応すべきという気持ちが表れている。

このような態度は「官僚的」といえるかもしれない。しかし、私はそうでもないと考えられる。規則に違反した人は法律によつて罰されるのは当然なことであろう。さらに言えば、警察官という県の重要な役人の恥ずべき不正行為は、「満」「日」を超える問題だとみているのである。「官僚」であるがゆえの対応判断ではなく、祝という人間の対応判断の表れとして、描かれていると読みたい。真吉は「有形無形の祝の協力は大きいものであった。」とあつて、

④に続いて祝への信頼感がますます固まってくる。この一文からも読み取ることのできるのは、祝の「有能さ」ではなからうか。

また、この事件の最後に、真吉が着任一週間目に起きた四人の脱獄事件を回想する場面がある。馬車の馬が怪我して血だるまのまま連れられてくる看守が祝にひどく叱られたのだった。その時「真吉は祝こそ空恐ろしい人間」と思った。この真吉の「空恐ろしい」気持ちはどこから来たのだろうか。これは祝の「宣傳」さへの驚きと冷酷さへの恐怖と私は読み取った。

◎ 募兵への協力

この部分は作品の「山場」⁸と呼ばれる部分である。なぜならば、募兵事務を通して、祝は周りから好評を得始めた。彼の評価は最初の「悪評」から変わってきた。私もこの部分が作品全体において、重要な位置を占めていると考える。

募兵には、「金があり、教養ある人間は決して兵隊にならない。人間のくずばかりが兵隊になるのだといふのがこの國の昔からの観念」が立ちはだかる。「昔からの観念」に注目する。つまり兵隊になるのは共同体において、顔が立たなくなることだ。しかし、祝が有力者や金持ちの息子を募兵からはずすようなこともせず、公平に募兵を行ったので、村民達は「募兵そのものの性質も見なほしたやうに見受けられ、凡ては案外スムーズに」進んだ。祝は昔からの村民の「観念」を改変するという壮挙をなしとげたことになる。祝の存在はいかに重要なかが、彼は「悪質」なのかどうか、ここで明らかになってくるだろう。

祝の意圖は明らかである。つまり、これからの募兵といふものは金持ちだらうが有力者だらうが、そんなものに物をいはせてのがれやうとしても無駄で、凡ては厳正に公平に行はれるものであるといふ観念を村民達に植ゑつけやうとしたのである。

この部分で最も明らかなのは、祝が事前に村民の昔の旧観念を変えつつもがあつたことである。祝の行為は単なる「公平処置」の次元に止まらず、「募兵」に対する根本的な改革計画を、祝が事前に構想していたことになる。そして、最後に成功した。つまり、祝は先を見通した考えを持っていて、最後に成功を収める、真剣な身を持つる人物として描かれているのであろう。

もし祝が、有力者や大地主に対しても高圧的に対処し、彼らを本意な立場においたというならば、それは確かに「官僚的」要素がある。しかし、彼は大多数の村民の利益を守つたため、彼らの好評を受けただけでなく、日系職員への祝に対する物腰も変つてきた。もし、「官僚的」というのなら、肯定的な意味で使われなければならぬまい。よつて、募兵事業に関する祝の描かれ方は、否定的な意味での「官僚的」とはいえないと私は考える。

④ 軍馬購買

◎ 事件をうけて、祝の受けた好評を広げる部分と見てもよい。軍馬購買において、祝はすっかり村民たち及び日本人職員に敬

愛されるようになった。小説のはじめでは「祝」と呼び捨てにされていたのが「祝さん」に変わってきた。

祝は検査の場所につき切りであて、馬をひいて来た村民を適當の位置に据ゑたりして世話をした。……（中略）かう云ふやうな一種の牽制を祝は無遠慮にやつてまはり、それ丈け村民達の氣持ちをらくにしてやつた。

④の場面で、もし祝が「官僚的」だったならば、軍が決定した価格で売らなければならぬ。祝は軍の立場に立つて、強く村民の方に押し付けるかもしれない。しかし、彼はそうしなかつた。村民にも世話し、軍の方にも積極的に交渉して、双方を満足させるまで、努力してきた。この場面から読み取れるのは、祝の村民思いと仕事への熱心さである。「官僚的」な性質はこの場面から見出すことはできないようである。

以上の抜き出した表現から見ると、祝には、否定的な意味での「官僚的」なものは見られない。

①②③場面では、祝の仕事の対象は上司真吉を除いて、それぞれ「満系村民」、「満系警察」と「満系の村民と有力者」であり、すべて祝と自民族「満系」とのやり取りである。しかし、④場面に、村民と日本軍の関連もある。この場面を最後に設定するのは、祝の仕事の対象を次第に、取り扱いきい対象にしていくという小説的設定を認めることができるだろう。そして、祝は逆にそう

いう状況の変化に上手に対応していくのが分かる。主人公祝は決して最初の噂のように「悪質」や、協和会事務長河上のいった「官僚的」ではなく、むしろ「融通の効く」、幅の広い人間として描かれていると言えるだろう。

小括

以上、祝の「宣傳的」又は「官僚的」について考察してみた。それらの考察から分かることは、少なくとも次の三点にまとめられる。

- (1) 作品中に描かれている祝の人物像を通して言うならば、初出で用いられている「宣傳的」は妥当な表現だといえるだろう。
- (2) 作者・牛島は祝の人物像を設定する時、彼の「官僚性」を強調するつもりはなく、「満洲国の地方の官僚」として描こうとしたとは言えない。
- (3) 祝はただの通訳として、民族の接点に立つからこそ、正義的、公平的に双方の間をバランスよく取るように努力している人間として描かれているといえるであろう。
- (4) 改訂前の「宣傳的」はより単純に主人公像を描き出そうとしたのではなからうか。

おわりに

以上、本稿においては、『祝といふ男』の初出と転載の形の確

認と検討をもとに、①分段の違いと②本文中の字句の改変を考察した。特に③を通して、作品の主人公「祝」の性格における最も目立っている「異色性」のほかに、一般的な役人と同様な、仕事に対する責任感、熱心さがいかに表現されているのかを検討した。

ここで改めて祝の人物像に関して、私の結論を言うならば、祝はいくら個性が強くても嫌がられても、彼の役人としての「異色性」よりも、熱心に働いている姿にもっと注目すべきだと思う。そうすると、この「祝」の人物像は、バランスの取れた人間として描いていることが見えるのではなからうか。

満洲文学作品の中での「植民地人」の描かれ方について、作品本文を丁寧に読み解くことで、改めて検討し直す必要がある。これは今後の大きな課題だと考えている。

〈注〉

(1) 本来ならば、研究史を丁寧に記すべきであるが、本稿では、紙幅の都合で割愛した。この作品を正面から取り上げた論としては大川育子「牛島春子「祝」といふ男」論(『昭和』文学史における「満洲」の問題) 早稲田大学教育学部杉野要吉研究室、一九九二年七月)と尹東燦「牛島春子『祝』という男」論(『満洲』文学の研究、明石書店、二〇一〇年六月)がある。

(2) この作品のほか、日向伸夫の『第八号転轍器』は初出を除いて五回転載された。満洲文学の作品にとって、五回以上転載されるのは、珍しいことだと見られる。転載歴は次の通りである。

- 初出「作文」三六集(一九三九年一月)
- ⑦日向伸夫『第八号転轍器』(砂子屋書房、一九四一年五月)
- ⑧橋川文三他編『昭和戦争文学全集』第一卷「戦火満洲に拳がる」(集英社、一九六四年十一月)
- ⑨川村湊編集『ふるさと文学館第五十五巻 海外編』(ぎょうせい、一

九九五年九月)

⑩黒川創編『(外地)の日本語文学選』第二卷「満洲・内蒙古(樺太)」(新宿書房、一九九六年二月)

⑪川村湊監修『第八号転轍器』、「日本植民地文学精選集」(「満洲編」六ゆまに書房、二〇〇〇年九月)(但し、これは⑦の小説集一冊の影印版)

(3) 作者牛島はこの作品に関して、後に回想をいくつか書いているが、段落構成を変えたかどうかに関する言及はない。

(4) 福島鏗郎「殺された文字と言葉―戦時下検閲とその足跡」(『言語生活』三五六、一九八一年八月)

「中央公論」特集「昭和の戦争とメディアの責任」(二〇〇五年一月)などの検閲と言論統制関係の論文や特集がある。

(5) 興味深いのは、作品発表後まもなくの転載③で、この文はすでに「官僚的」に変化してしまったことである。これ以後の転載は「官僚的」をずっと踏襲してきた。

(6) 「宣傳的」と「官僚的」はどのように違うのかについて、『日本国語大辞典・第二版』(小学館・二〇〇一年)によって、この二つの言葉それぞれの意味を改めて確認した。以下は作品の内容に適切な意味を抽出する。

①「宣傳」③事実以上に大きに言いふらすこと。用例として、横光利一の『機械』(一九三〇)と田口竹男の『祇王村』(一九四二)から抽出した例文があるが、ここでは略にする。(第八巻・一三三頁)

②「官僚的」(形動)官僚主義的な傾向や態度であるさま。転じて、一般的に、相手の意向や立場を無視して、形式的、権威主義的な態度、傾向についてもいう。田中千禾夫『千鳥』(一九五九)からの例文がある。

(第三巻・一四二頁)なお、念のために、『広辞苑』第六版(岩波書店、二〇〇八年一月)も確認したが、同様な説明である。

(7) 川村湊『異郷の昭和文学』(岩波新書、一九九〇年十月)一五七頁

(8) 前掲尹氏著、一九五頁

主指導教員(鈴木孝庸教授)、副指導教員(橋谷英子教授・廣部俊也准教授)